日本音楽集団
PRO MUSICA NIPPONIA

PRO MUSICA NIPPONIA

第168回定期演奏会
The 168th Regular Concert

クリティックス・プロジェクト・シリーズⅠ

上野 晃

現代邦楽の領域Ⅰ：個と群のリレーション

Critics Project Series Ueno Akira
Territory of contemporary music
for Japanese traditional instruments,
No.1: Relations of individual to the mass

2002年9月20日(金)
午後7時開演(6時30分開場)
場所:津田ホール(JR千駄ケ谷駅前)

主催：特定非営利活動法人日本音楽集団　助成：平成14年度文化庁芸術団体重点支援事業

ホームページ URL :http://www.promusica.or.jp/index.html　http://www.wahoo-net.com/promusica/　E-mail office@promusica.or.jp

プログラム

一 三味線協奏曲（1967年）長沢勝俊作曲
NAGASAWA Katsutoshi : Shamisen Concert

［三味線独奏］簑田司郎

［笛］西川浩平
［尺八］Ⅰ水川寿也・砂川憲和　Ⅱ添川浩史・渡辺淳
［琵琶］首藤久美子
［箏］Ⅰ早川智子・久本桂子　Ⅱ久東寿子・三宅礼子
［十七絃］大畠菜穂子・城ケ崎美保
［打楽器］仙堂新太郎・多田恵子
［指揮］稲田康

二 二種の琵琶のための協奏曲（1991年）川崎絵都夫作曲
KAWASAKI Etsuo : Double Concerto for two Biwa

［琵琶］田原順子・首藤久美子

［笛］越智成人
［尺八］Ⅰ水川寿也・砂川憲和　Ⅱ加藤秀和・阪口夕山
［箏］Ⅰ桜井智永　Ⅱ田村法子　［十七絃］城ケ崎美保
［打楽器］仙堂新太郎・望月太喜之丞
［指揮］稲田康

休憩

三 Seita（1978年）ヘンリク・ノルドグレン作曲
Pehr Henrik NORDGREN : Seita

［尺八］三橋貴風
［箏］Ⅰ吉村七重　Ⅱ熊沢栄利子
［十七絃］宮越圭子

四 《四季》より〈春〉〈冬〉
アントニオ・ヴィヴァルディ作曲（1725年頃）角田圭伊悟編曲（1975年）
Antonio VIVARDI- TSUNODA Keigo : Spring & Winter from Four Seasons

［箏・プリマ］砂崎知子（客演）

［箏］Ⅰ吉村七重・田村法子　Ⅱ熊沢栄利子・山田由紀　Ⅲ桜井智永・渡辺正子
［十七絃］宮越圭子・丸岡映美

一、 三味線協奏曲　長沢勝俊作曲

1967年秋、日本音楽集団第6回定期演奏会において、長沢勝俊の《三絃と日本楽器によるディヴェロプメント》が初演された。第1回定期演奏会より毎回新作を披露して来た長沢だが、三絃を独奏楽器として扱うのは、初めてだった。すでに《子供のための組曲》と《組曲：人形風土記》で、邦楽器のマルティ・アンサンブルの領域を築きつつあったが、名手杉浦弘和をソリストに、この和楽器による協奏的作品を書いた。73年秋の第20回定演のときに、独奏パートと第三楽章の一部が改訂されて、《三絃協奏曲》とタイトルを新しくし、78年春の第46回定演に際して、《三味線協奏曲》とまたも改称されたが、このころまでずっと、杉浦（現・杵屋五三吉）が、当作品の独奏スペシャリストを続けた。

独奏三味線／篠笛／尺八Ⅰ・Ⅱ／琵琶／箏Ⅰ・Ⅱ／十七絃／打物による編成。序章は三絃ふうで華やかに、中間楽章では、駒と撥を替えて琉球の三線（蛇皮線）に似せ、終楽章は、太棹か低音三絃の民謡三味線ふうに、と変わっていく。シンコペーション・リズムを使った陽気で賑やかな楽想に支配され、独奏カデンツァには名人芸も用意されている。

二、 二種の琵琶のための協奏曲　川崎絵都夫作曲

1991年早春の日本音楽集団第117回定期演奏会は、〈琵琶楽の饗宴〉とタイトルされ、自作自演も加えて新しい琵琶楽が五作品、特集プログラムされていた。胡弓と琵琶、尺八と琵琶、といった異色のデュオにならんで、川崎絵都夫の委嘱新作《ダブルコンチェルト―二面の琵琶のための協奏曲》が初演された。複協奏曲の意味するところは、薩摩琵琶と筑前琵琶を同列に扱うという稀有な試み。元来語り物の伴奏である琵琶を、複数で合奏することはあり得ないし、別系統の異種の琵琶が合するというシーンは考えられない。この禁断を超えて、初演時は、しかも薩摩と筑前がそれぞれ二人ずつ、複々の琵琶で協演した。

独奏琵琶Ⅰ・Ⅱ／篠笛／尺八Ⅰ・Ⅱ／二十絃箏Ⅰ・Ⅱ／十七絃／打楽器Ⅰ・Ⅱの構成。今度の再演のために、若干の改訂がおこなわれた第二稿が披露される。管絃打のアンサンブルとともに、二面の琵琶は、きわめて器楽的に二パートで呼応する。第Ⅰ楽章は、篠笛と尺八による序奏に導かれて、琵琶の主題リレーションから、速い動きで賑々しく展開。第Ⅱ楽章は、静かにゆったりと対話的に運ばれ、木質の打物や複鈴の音も辺りを雅にする。第Ⅲ楽章のやや古風ながら舞い姿を偲ばせる歌謡的楽景をへて、終楽章の津軽三味線を想わせるビートで驀進、強靭にして躍動的な楽興に引き込んでいく。

三、 Seita　ペール・ヘンリク・ノルドグレン作曲

1981年初夏、日本音楽集団第65回定期演奏会は、いつもと趣向がまったく違っていた。〈外国人による作品特集・その一〉と呼称、三橋貴風のプロデュースで五年毎にシリーズとして続けられ、昨年〈そのV〉のプログラムで、計十八か国、延べ二十九の作品に達したが、二十一年まえにこのスタートラインにならんだ外国人作品の一つが、ペール・ヘンリク・ノルドグレンの《Seita—尺八と二面の箏と十七絃のための》であった。1974年、ノルドグレンの《秋の協奏曲—邦楽器四重奏とオーケストラのための》初演でヘルシンキ・フェスティヴァルに招聘された〈邦楽4人の会〉が、あらためてこのフィンランドの新進作曲家（当時三十歳）に委嘱して書かれた《セイタ》。初演は、78年春の当グループ第35回定期演奏会においてだった。

ノルドグレンは、1970年から73年にかけて東京芸術大学に留学、日本伝統楽器のための作品も、これが第三作目になる。〈Seita〉は、ラップ族のフィンランド語で、樹や石などに宿って魔力をもつ物神をいうらしい。魚のセイタ、大鹿のセイタ、トナカイのセイタなど、神秘と幻想を秘めて北極圏のラップランドに存在してきた。ラップの五音音階の旋律をしばしば素材に用いるが、それは日本の伝統楽器によくマッチする、とノルドグレンはいう。日本的な曲線やヘテロフォニクな進行、抒情と神秘、いくらか暗く、また荒々しくもあり、そういった風土的な感性とシリアスな精神を伝えてくる。

四、《四季》より〈春〉〈冬〉　アントニオ・ヴィヴァルディ作曲／角田圭伊悟編曲

《四季》は、作曲者の命名ではない。独奏ヴァイオリンと通奏低音（チェンバロまたはオルガン）を含む弦楽五部のために書かれた《ヴァイオリン協奏曲》で、ヴィヴァルディ自身は、〈四声部または五声部のコンチェルティ〉といっていただけ。この全十二曲からなる作品八の《ヴァイオリン協奏曲集》には、〈和声と創意の試み〉という副題が付くけれども、第一番から第四番までが、春夏秋冬をうたった十四行詩ソネットをテクストにしているので、《四季》と呼ばれるようになった。作詩者は不明、作曲年代も50歳ごろの1725年ごろとしか判らないが、ヴィヴァルディは、種々な楽器をソリストにして四百数十曲もの協奏曲を書いている。

この《四季》の顕著な特色は、急・緩・急の三楽章の協奏曲形式をとった標題音楽で、かなりソネットに忠実に音楽を添わせ、描写的な箇処も少なくない。プリマ箏と箏群による《四季》は、ディスクのために考案され、またたくまに一万枚を越える大ヒットになった。独奏箏／箏Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ／十七絃Ⅰ・Ⅱという編成は、ほぼ原曲のままで、楽譜もほとんど手を加えていないため、箏では転調を即時におこなうのが難しく、ステージ演奏は、1979年の日本音楽集団第51回定期演奏会〈日本の四季・西洋の四季〉で初めて実現した。なお今回は、箏が十三絃でなく、二十絃箏が使われる。ソロの鮮烈なプリマぶり、全合奏のトゥッティでリトルネルロを快速調でドライヴするのを聴くと、ついこれが原曲であっても—と錯覚が起きてくる。

上野 晃プロフィール

1927年7月26日　大阪市生まれ。音楽評論家。
日本の作曲／日本音楽・芸能／吹奏楽などを専門分野にする。
「音楽の友」「バンドジャーナル」「邦楽の友」など、各誌に毎月演奏会批評その他を寄稿。
1970年代前期より90年代後期にわたる二十五年間、文化庁芸術祭執行委員、芸術選奨・音楽部門審査委員、芸術作品賞選考委員、日本芸術文化振興会・専門委員などを務める。
現在、日本打楽器協会・評議員、清元清栄会・評議員、国際現代琵琶楽会・顧問、日本近代音楽館・資料委員、東京文化会館運営委員、日本アルバン・ベルク協会・理事など。
音楽執筆者協議会、東京音楽ペンクラブに所属。

砂崎知子プロフィール

東京芸術大学大学院修了。これまでに、現代の箏曲をテーマにしたレクチャーコンサート、リサイタルを意欲的に行う。また箏によるヴィヴァルディ「四季」等、画期的なレコードも手掛けている。1987年、文化庁芸術祭賞受賞。近年は作曲活動にも力を入れ、大日本家庭音楽会から作品集を発表。現在箏曲宮城社大師範、現代邦楽研究所講師として国内外のステージ、テレビ、ラジオで活躍中。
1974年～81年まで、日本音楽集団に在籍。

山田美喜子、佐藤敏直氏逝く

山田美喜子氏（日本音楽集団名誉団員、琵琶奏者）

長く闘病生活をおくられていた日本音楽集団創立メンバーで名誉団員の山田美喜子氏が今年2月28日に逝去されました（享年90才）。日本音楽集団が行う学校公演や国内外での演奏には、必ずといって良いほど琵琶が入っています。楽器紹介では琵琶の弾き語りで「那須与一」等を演奏しますが、それは集団の特徴でもあり魅力になっている所以でもあります。

氏の功績は何といっても集団初期の楽器編成に琵琶を定着させたことです。若いメンバーとともに難しい新曲に挑戦、合奏曲に独奏曲に琵琶の新境地を切り開き、その魅力と可能性を引き出しました。楽器の改良や演奏技術の開発、また田原順子らを育てるなど後進の指導にも大きな功績を残されました。氏自身、国内外の多くの公演にも参加、その若さとパワーには舌を巻いたものです。以降の琵琶が、現代邦楽の中の花形楽器として脚光を浴び、日本はもとより世界に羽ばたく道を切り開かれた功績に対してあらためて敬意を表したいと思います。

佐藤敏直氏（日本音楽集団団友、作曲家）

本団の団友であり「ディヴェルティメント」の作曲家としても有名な佐藤敏直氏が、今年3月18日、脳梗塞のため逝去されました（享年65才）。「氏との共同で今後も一層の活動を」と考えていた私たちには全く予期しなかった訃報であり、大きな衝撃を受けました。一昨年5月の定期演奏会「コンポーザーズ・プロジェクト・シリーズ」では主役であり、今年の2月16日には、勝ちどきの新第一生命ホールで「ディヴェルティメント」「二棹の三味線のための序破急」など、新旧の名作を再演し、終演後には仲間と一緒に「もんじゃ焼き」を楽しみ、酒を酌み交わしながら、現代邦楽界の現状について口角沫を飛ばし、今後の協力を誓い合ったばかりでした。誠に残念としか言いようがありません。氏も志し半ばでさぞかし残念なことでしょう。私たちは氏の遺志を受け継いで頑張ることを誓いました。

お二人のご冥福を心よりお祈りいたします。

【次回第169回定期演奏会は第一生命ホールで開催】

2002年11月2日（土）PM2:00開演

第169回定期演奏会は、晴海アイランドトリトンスクエアに音楽専用ホールとして生まれ変わった第一生命ホールに会場を移して開催することになりました。今から38年前、日比谷にあった同ホールで第1回目を開いた日本音楽集団にとっては思い出のホールです。
また、今年度より文化庁の芸術団体重点支援（旧アーツプラン21）を受けることになり、春秋2回の定期は第一生命ホールとの提携のもとに一層拡充した企画を図って行きたいと考えています。

賛助会員へのお誘い

1999年10月、特定非営利活動法人日本音楽集団が発足したのを契機に、賛助会員を募集しています。多くの方々からの支援を仰ぎ、息の長い活動を目指したく、ご協力お願い申し上げます。募集の詳細はチラシをご参照ください。

賛助会員（五十音順）

法人・・・・・
（株）全音楽譜出版社
（株）宮本卯之助商店

個人・・・・・
飯吉正山　青戸順子　青柳　堯　朝吹英世　安達眞五　新井克輔　飯塚絹子
家永和治　逸見　護　伊藤美恵子　今村厚子　今村文彦　植木眞代
大木紀史　大関富枝　太田颯衣　川壁　正　岸　彰則　木津のぶ　小泉和子
後藤　隆　後藤陽子　桜田正憲　白水昭彦　佐々木浩二　杉田和繁　関　厚雄
田原たま　堤　紀江　手塚愛子　藤山雅弘　中島靖子　中島康子　野原清子
古川羽衣山　本田　実　水野正徳　森山俊雄　渡辺京子　渡辺ハル　渡辺治子

特定非営利活動法人
日本音楽集団
〒151-0073　東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302　TEL03-3378-4741 FAX03-3376-2033
ホームページURL http://www.promusica.or.jp/index.html http://www.wahoo-net.com/promusica/ E-Mail office@promusica.or.jp

箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、
楽器の本質を追究した箏

十七絃箏
二十絃箏
二十五絃箏

Tokyo Kinkodo
時を超え心に残る音づくり
有限会社 琴光堂
〒152-0003東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL03(3792)8481 FAX03(3792)8437
E-mail：kinkodo@v004.vaio.ne.jp